

---

# グーラル太陽系からの来訪者

羽美之里波九

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グラール太陽系からの来訪者

### 【Nコード】

N6972Q

### 【作者名】

羽美之里波九

### 【あらすじ】

魔法主体の世界に迷い込む魔法耐性が低めの種族のお話。

## 1話（前書き）

文章力や語彙力が低い私の練習も兼ねた作品です。

改善した方がよい点や設定の矛盾等についてはご指摘頂けると嬉しいです。

## 1話

「各パーツ損傷率、0%。ナノトランサー内アイテム 武器及びシールドライン以外全て消失。SUVウェポン 衛星軌道上に単独で存在を確認するものナノトランス転送は不可能と判明。パートナーカード、及びリトルウイングへの通信 反応無し。各惑星のガーディアンズ・企業・通信中継器に対しても同様」

彼が目覚めるとそこは深い森の中だった。頭部の大きなモノアイに被さるバイザーのセンサーをフルに稼働させ、薄暗い環境への適応をさせつつ、木々の隙間を見上げれば見覚えの無い大きな天体が優しい光を放っている。どことなくニューデイズの衛星「ツキ」とやりに似ているが、この大きさ（若しくはこの星からの距離）はソレと大きく異なる。

一通りの現状確認をして彼 機械の身に性別があるというのも奇妙な話だが は溜め息のような機械音を漏らした。

彼は同盟軍出身者や生まれたばかりの同族によくある、不測の事態に対処出来ない杓子定規のキャストではない。製造されてからの年月こそ十年程ではあるものの、その間にガーディアンズでSEED事変を経験し、キャストと認められなかったパートナーとの離別を経験し、ガーディアンズを離れた後は軍事会社の傭兵となり、そして旧文明人とも戦った歴戦の戦士である。

敵による強襲、突然の仲間の死、様々なアクシデントを経験してきた彼にとって不測の事態などというものは、その豊富な実戦経験を以ってして対処し慣れた物なのだ。

しかしその彼でさえも今回ばかりはどうして良いかさえ分からず、立ち尽くしてしまっている。

「精密測定結果…重力、パルムの1.12倍、木々より垣間見える星々も星図とは一致せず…か。ここは何処だ？」

自分が今何処に居るかが分からないというのは現代グラール人で

ある彼からすればとても不安な事だった。通信が不可能なりユクロ  
ス内部でさえも、衛星からの地図表示やSUVの転送、精密砲撃等  
が可能だったのだ。それさえも不可能という現状は、遭難としても  
最悪のケースである。

GRMの工場にメンテナンスへと出かけて、内部動力を一時的に  
全て停止させた後の記憶が無い彼からすれば、一瞬にしてGRMか  
らこの森へとワープしたような物だ。その過程や方法等分かるはず  
も無い。

最初にこれがVRミッションである事も疑いはしたが、大気や土  
壌を調べた結果、VRミッションでは有り得ない程リアルに大気  
の汚れや土中の微生物が再現されているため、その可能性は否定され  
る。ならば、これは紛れも無い現実なのだろう。

「取りあえずは人間を探すべきだな」

幸い衛星軌道上に電波を飛ばした時、幾つか人口衛星のような物  
があるのを彼は感知出来た。ならば、この謎の場所にも人（或いは  
SEED）に類する者が居ておかしくは無い。

まずは真っ直ぐ南下してみようか、と彼は普段は絶対に使わない  
であろう内蔵方位磁石を起動させ、南へと向けて歩を進め出した。

「待て」

私が目を覚ました位置より出発し五分ほど歩いた時、突如として  
その声は頭上から降ってきた。幼子の声だ。見上げればそこ  
にはヒューマンの女兒。腰にまでかかる金色と薄手の漆黒のローブ、  
こちらを威圧するような視線が特徴的な“飛んでいる”その幼子を  
見て、場違いにも「寒くないの？」等とズレた感想を抱いてしまっ  
た。

「茶々丸、そのロボットを拘束しろ」

「了解、マスター」

「……話を聞いてくれる雰囲気ではないな」

私が道を聞く間もなかった。後ろからはいつの間にか現れた女キヤストが拳を振りかぶり迫っていたのだ。それを緊急回避でやり過ぎつつ、使用する武器をナノトランサーより選ぶ。

どうでもいいが、今日日キヤストに対しロボットと古い煽り方をするヒューマンとは珍しい。時代劇が好きな女兒……ガーディアンズ時代の知り合いが聞いたら喜びそうだ。

武器は殺傷設定ではなくスタンモードだ。思い当たる理由もなく先に攻撃を受けたという事は、此方に非がある可能性もある。例えば、この森が軍事機密に関わる兵器の実験場で立ち入りが制限されている場合、その管理者に撃ち殺されても文句は言えないのだ。同盟軍なら、カーツ氏のような柔軟な思考の持ち主以外まずそうするだろう。また、不審人物が私有地に入ってきた場合に、それを迎撃するべく自衛行動に出るというのも、ローグスがあちこちに居るモトウブ住人の間では当然の心理だ。彼女らが私を攻撃するのは何ら不思議ではない。

ならば動けなくなる程度にダメージを与え、こちらの事情をゆっくりと説明するのが得策だろう。

バシユウウという気密扉が開くような（個人的に）耳障りの良い音と共に、亜空間で粒子化されていた武器が構えた両手へと再構成される。

装備するのはこの間手に入れたばかりのライフル「エッジブレイザー」だ。私の所有するライフルにはこれよりも更に強力な物もあるが、白兵戦での運用も出来るという長所から最近では専ら好んでこれを使用している。

フォトンを実体の刃として飛ばすこの銃だが、当然スタンモードにすれば殺傷力はなくなり、相手に衝突する直前にフォトンの構成体が弾け衝撃のみを与えるという仕様だ。感覚としては「ヤスミノコフ」シリーズのスタンモードであるゴム弾が直撃した時に近い。ヒューマンの女兒に当てるのは気が引けるが、そこは仕方がないと

割り切ろう。

「『氷爆』」

こちらの武器出現に合わさるかのように女兒からのテクニクが飛ぶ。ラ・バータに近いが、変な試験管を用いている事といいやはりこの場は私の知識にない未開の星と考えた方が良さだろう。エツジブレイザーを突き出し、迫り来る氷を叩き割る。その際女兒に向かって射撃をしようとしたが、茶々丸と呼ばれた女キャストがそれを邪魔する。ナツクルも装備せずに格闘をするとは無茶な行為だ。PAでもないその攻撃は不思議な軌跡をもつて私に迫るが、シールドラインに阻まれて直撃には至らない。キャストである私が法撃より物理攻撃に耐性があることも合わせ、此方は気にすることも無いレベルだと判断出来る。ならば、対処は余裕だ。ジャストカウンターによる至近距離での一射でキャストは大きく吹き飛び、距離が開く。流石に一撃でダウンしないだけの体力はあるようだ。

「チツ…大した硬さの障壁じゃないか。茶々丸、そのまま一端下がれ！」

「ツ…了解」

女兒が先程よりも多くの試験管を取り出し、詠唱を開始する。同時に私の身体を無数の糸が固定し、こちらの反撃を阻害しようとしてきた。

彼女の術はテクニクとは体系が違うが、個人の法撃力を利用した術というものは大概集中する時間が長ければ長いほど強力なものが放てると、相場が決まっている。そして詠唱をするという点はグラール教団の大規模術式等と似ている。古くからある詠唱式の術式ならば阻止せねば、キャストである私にとっては危険な攻撃だ。

まあ、それでも、こんな細い糸で私を拘束するというのは無理な上、キャストを相手に遠距離での攻防を挑むのは悪手だと言えるが。 「n i v i s t e m p e s t a s o b s …」 「させんよ」 「うわああつ!?!」

当然の結果として糸は引き千切られ、エツジブレイザーから間断

無く放たれた四つの弾丸がヒューマンの四肢に被弾する。もし強力なシールドラインを装備していたらスタンモードで貫けるかは疑問だったが、Sランクの武器だけあって問題は無かったようだ。

そこそこ高速で飛行をしていたから、他種族の素人レンジャーなら外したかもしれない。しかし、私は熟達したキャストのレンジャーだ。キャスト至上主義を語るつもりは毛頭無いが、射撃武器への適正と言う点では内蔵された弾道予測機能や機械の補助があり、脈や筋肉の微細な振動による腕のブレといった、不安定な要素が無い我々が最も優れていると断言できる。

身体が機械故の精密動作に、十年蓄積された風・温度・湿度等の各データによる微調整が加わるのだ。最低限この弾丸より早く動いて貰わねば、射撃を外す道理は無い。

「マスター！」

落下してきた女兒はキャストが受け止める。当然意識はあるが、手足は数分ほど痺れたような感覚で動かないだろう。彼女の職業はフォースだろうから完全に油断は出来ないが、これで一応は戦闘能力を奪い、話の準備が整ったと言える。

「落ちていくくれ。これだけ撃ちまくつといて言うのは変だが、私に攻撃の意志は無いんだ。スタンモードとはいえ何度も幼子を撃つのは気が引けるから、大人しくこっちの話を聞いてくれないか？」

「ならば、君が少しの間大人しくしていれば問題は無いよ」

急にこちらの言葉に割り込んでくる男の声。もう一人居たのか、と私が振り返ろうとした瞬間、デガーナ・カノンで打ち抜かれたかのような衝撃が頭部へと奔り、私は回転しながら地面へと叩きつけられた。シールドラインで幾分軽減されたためパーツシエルに傷は付かなかったが、今ので内部の人口筋肉や基礎フレームにダメージが通った筈だ。もしかしたら頭脳体にも。

「あ…マズい」

反撃しようと立ち上がろうとしたが、それに反して手から力が抜けていく。

手を離れたエッジブレイザーが粒子化してナノトランサー内に戻るが、それどころではない。悪い予想通り頭脳体にダメージがあったらしく、強制精密修復モード……つまりはシステムが休止状態へと移行するのを止められないのだ。モノメイトの一つでもあれば修復速度の活性化でなんとか堪えられただろうが、残念ながら所持品内には無い。

頭脳体が休止状態へと強制移行してしまう前、最後に見たのは攻撃を加えてきたらしきヒューマンの眼鏡男だった。

「随分とあっけなかつたな。壊れたか？」

ピクリとも動かない機械仕掛けの侵入者を見下ろしながらヒューマンの女兒　いや、真祖の吸血鬼エヴァンジェリンは吐き捨てるように言う。どうやら先程撃ち落とされたのが余程気に入らないらしい。

「動力が動いている事から休止状態に入っただけかと思われませう。マスター」

「無理も無いさ。どんな熟練した戦士だって不意打ちにある程度弱いのは常識だからね。それが機械なら尚更さ」

眼鏡の男タカミチと、女キャストであると勘違いされていた茶々丸は倒れた機械の身体を調べて回っている。武器が消えてしまった仕組みは理解できないが、隠された武器等が無いかチェックするに越したことは無い。…とはいっても、ナノトランサーが普及しているグラール文明において隠し武器という概念はほぼ存在しない。彼のパーツシエル、ジャステイスアーマーをいくら調べたところで何かが見つかるというわけでもないが　知らぬタカミチはご丁寧に彼を攻撃したままに咸卦法を継続している。

「近接格闘時の機体制御システム、馬力、装甲材質、射撃技術、障壁らしき防壁構築技術、どれをとっても私より上をいつていると推

測できません。この学園都市内の工学部が作った物でないのは明らかですが、他の魔法組織がそう易々と作る事が出来る物でもありません。一度学園長の判断を仰いだほうがよろしいかと思えます」

茶々丸の進言で会話は学園長に指示を仰ぐ方向へと流れていく。

「確かに。彼？ も話し合う意志はあるようだし、何も壊す必要は無いからね」

「フン、私を囮にして全部聞いていながら豪殺居合拳を放った本人がよく言うな」

「さっきの彼と同じで、僕も対象を無力化してからでないと言っていて話ができないと思ったからさ」

それに今日は満月だからお前はでしゃばるなって言ったのはエヴァ自身だろう？ と彼は軽めに苦笑しながら続ける。

一丁前に大人ぶった口を聞くようになった弟子のような存在の脛に蹴りを入れつつも、エヴァも相手の実力を測り違えていた手前、文句を言う訳にもいかなかった。

不満を紛らわせる為に（蹴りを放ったにも関わらず）「まだ足が痺れているから運べ」等と我俣を言い、タカミチに抱きかかえられるエヴァンジェリン。まるで兄妹や親子、或いは恋人のように見えるやり取りをしながら学園長の所へ向かう二人を見て、ロボットをワイヤーで引きながら数歩後ろを歩く茶々丸は、ほんの少しだけ笑顔を浮かべて「楽しそうですね、マスター」と呟いていた。

その呟きは風へと吞まれ、まだ肌寒い学園の空へと吹き飛んでいった。

## 1話（後書き）

【後書きや読まんでも良い備考のようなもの】

・ 終わり方が無理矢理 綺麗な締め方が難しくて書けません…要改善

・ エヴァとタカミチの関係について。エヴァの置かれた境遇からしてエヴァ×タカミチはアリだと思うが…どうなんだろう？タカミチはイケメンだし、エヴァが親しい魔法先生って学園長と彼くらいだから、長い付き合いの間にナギから乗り換えても不思議じゃないと思う。

・ オリ主…名前が出ずに一話を終える。彼の強さはP S p o 1 \ 2 iの主人公を想定しているので、P S 世界ではトップクラスの強さです。ボスを倒しているからトップクラスでも…イイヨネ？。故に初期ネギや殆どの魔法先生よりは強く設定しています。でも空戦能力やS U V無しでの破壊能力は低いので、戦闘力はタカミチより一歩下だと想定。不意打ちですが早速負けてくれました。

・ オリ主はキャストとしての基本性能はもうカスタム状態で成長が望めないの、今後は魔法や気の扱いを学ぶことで徐々に成長予定でもネギみたいにグングン伸びないし、闇魔法ネギには普通に負ける。

・ オリ主に対するヒロイン…やっぱりキャストだし茶々丸が良いのだろうか…P S 世界のキャストは感情豊かだが、恋心等についての描写は結構少なめでどう描いたらいいか迷いそう。

・ 更新速度……初作品の上見切り発車だから亀。一ヶ月に一度程度

を期待してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6972q/>

---

グーグル太陽系からの来訪者

2011年2月6日14時10分発行